

病歴の長い潰瘍性大腸炎において大腸ファイバースコープで発見された異型上皮に関連した病変あるいは腫瘍：大腸切除の適応

Dysplasia-associated Lesion or Mass (DALM) Detected by Colonoscopy in Long-standing Ulcerative Colitis: an Indication for Colectomy: M. O. Blackstone, R. H. Riddel, B. H. Gerald Rogers, B. Levin (Gastroenterology 80: 366~374, 1981)

著者らは、シカゴ大学で病歴の長い潰瘍性大腸炎患者の監視システムを作り、大腸癌の発生をできるだけ早く診断する努力をしている。今回、4年間に7年以上病歴のある広汎あるいは全結腸型の潰瘍性大腸炎112名に対して大腸ファイバースコープを施行し、Dysplasia associated lesion or mass (以下 DALM)

について検討した。ルーチンに盲腸から直腸まで平坦な粘膜から10cm間隔に少なくとも5個所の生検が、疑わしい病変からは少なくとも3個所の生検が施行された。

Dysplasia の分類は、なお病理学者の間で問題となっているが、共著者の R. H. Riddel が生検標本を mild, moderate, severe と分類した。

112名の潰瘍性大腸炎患者のうち12名にDALMがみられた。内視鏡的に single polypoid mass が5例、plaque like lesion が2例、multiple polyps が5例であった。この12例のうち7例に癌が存在していた。強調したいことは、5例の single polypoid mass の患者は全例浸潤性の癌がみられたが、生検がたくさん施行されても診断できなかった。癌を併存している患者7例中2例が severe dysplasia とされたが、残り5例は mild, あるいは moderate で、必ずしも dysplasia の程度

と癌の存在とは関連はなかった。

一方、平坦な粘膜から10cm間隔に生検された27名のうちでは、1例のみに癌が診断され、12例のDALMのうち7例が癌であったことは対照的である。このことは、長期にわたる潰瘍性大腸炎患者にみられるDALMは癌に対する high risk と考えられ、大腸切除という外科的適応の指標である。

【コメント】 Morson は1967年の Gut の論文で、潰瘍性大腸炎の癌化を発見するために直腸生検による異型上皮の出現をよりどころとしているが、これは colonoscopy の普及以前のことであり、現在では直腸生検で所見の乏しい癌の例のあることがわかり、total colonoscopy で大腸全体からの生検が必要なこと、特にDALMという肉眼所見の重要性を主張した興味ある論文である。

(愛知県がんセンター第1内科

松浦 昭 抄)

Coffee Break

飲酒者の血中トリプシン

Temler らによって開発された血中トリプシン様免疫活性を測定する方法が現在膵炎診断に広く用いられるようになってきた。

Adrian らによれば、慢性膵炎で脂肪性下痢を伴う患者の空腹時血中トリプシン値は極端に低値を示し、脂肪性下痢を伴わない慢性膵炎患者では正常値を示すという。そこで、食餌負荷を行うとどうだろうと気になるが、Adrian らや Lake-Bakaar らによれば、余り有意の結果が得られないということである。

それではセクレチン注射によって刺激するとどうなるだろうか。

1日に150g以上のアルコール常飲者と、アルコールは飲まないが膵外分泌試験でリパーゼ分泌低下のみられる患者について、セクレチン刺激によって血中ト

リプシン値がどう変わるかを調べてみた。

早朝空腹時に採血し、セクレチン 75 Cu を静注し、その後5分、15分、30分、45分、60分、と採血してトリプシンをラジオイムノアッセイで測定した。

その結果では、空腹時血中トリプシン値は両群で差はなかった。ところが、刺激後1時間の integrated trypsin output は、アルコール常飲者では高値を示し、対照群では低かった。このことは、たとえ臨床的に無症状であっても、アルコール常飲者ではトリプシン(トリプシノーゲン)の血中への流出が著しいということである (Ferri ら)。

アルコール常飲者は膵炎準備状態にあると考えられ、この方法を用いて膵炎予防対策に役立てることができるかもしれない。

(M)